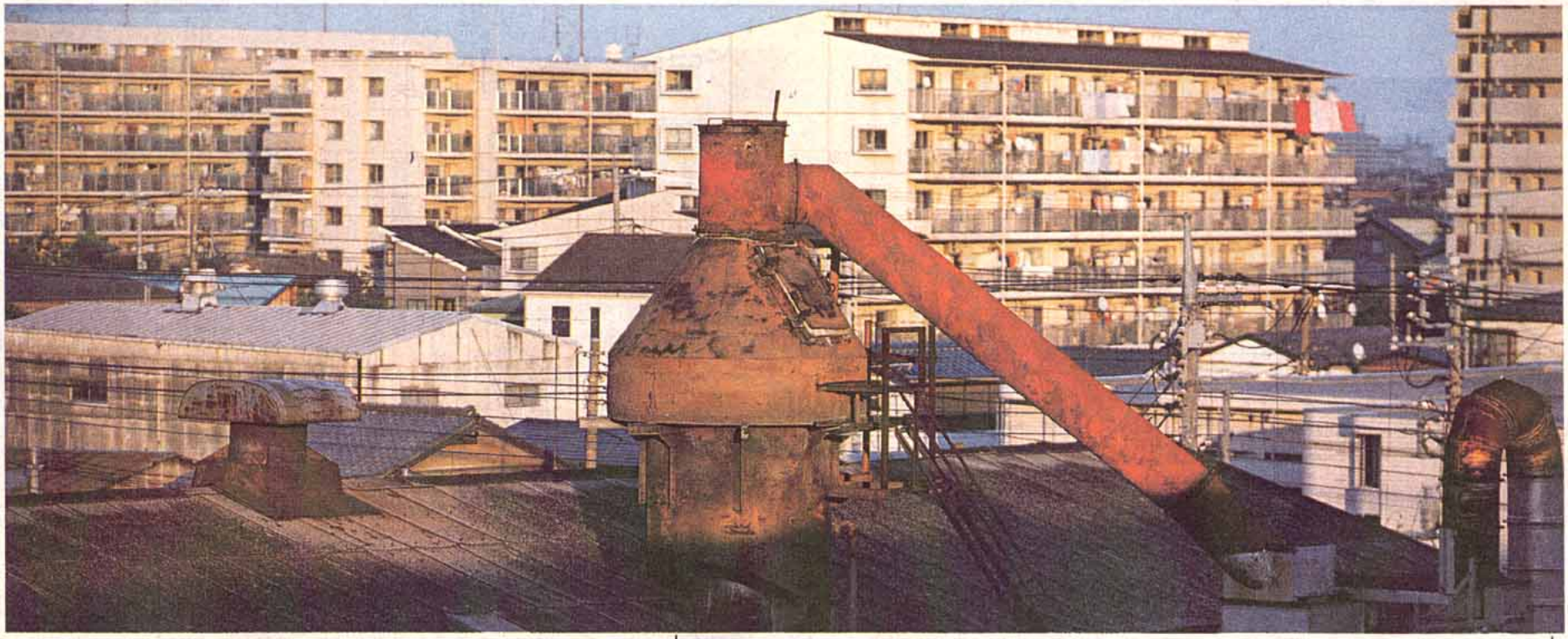

鋳物工場の屋根に夕日を受けてキューポラが立つ（埼玉県川口市）＝写真　山口朋秀

# 名作のある風景

## トタンの下 交流の息吹

「ここは準工業地域です。多少の騒音や煤煙、臭気はご承知下さい」。JR川口駅周辺を歩くと真新しいマンションのわきに身を隠すように操業する鋳物工場が目につく。どこも大きなおわびの看板を掲げる。肩身が狭い思いを強いられている様子だ。

全国にその名を知られた鋳物の町、埼玉県・川口。その歴史は室町時代にさかのぼる。近くを流れる荒川から鋳物製造に使う砂や粘土が採れ、日光御成街道や舟運など交通至便だったことが隆盛の理由だった。

主役ジュンを演じた吉永小百合の人気を不動にした映画「キューポラのある街」が公開された一九六二年ごろが「鋳物の町」の全盛期だった。川口駅周辺の鋳物工場は六百を超えていた。屋根を貫きそびえるキューポラ（鉄を溶かす炉）から吹き上げる炎が夜空を赤く染めた。

「おらあ、親方が番頭もかねている、ちっぽけな鋳物の町工場が性にあってるんだ」とジュンの父、辰五郎が言うように、ほとんどが零細工場。第二次石油ショック以降、移転や廃業が相次ぎ、今や操業するのは百六十足らず。しかも電気炉が主流になり、鋳物の町の象徴だったキューポラはもう数えるばかりだ。

閉鎖した工場跡にはマンションが建った。ここ十年間に市内で二百三十七棟、一万二千四百四十七戸の分譲マンションが生まれた。「ここは東京二十四区」が業者の謳い文句である。

そのシンボル、日本一の超高層五十五階建てマンションの直下にトタン屋根の工場が残る。七九年に鋳物生産をやめ、貸工場にした。ユニークなのは厚子が芸術家たちであること。金属や木を造形する彼らにとり騒音を気にせずにすむ工場はアトリエに絶好だ。

「町から粉塵と焦げ臭いにおいが消えていく。うれしい半面、自分の過去が奪われていく気がしたんです。やっと果てるのは寂しい。なんとか工場を残せないものかと思って……」と三代目だった金子長治さん。昨年、ギャラリーを開設、古びた工場内で企画展も頻繁に開く。

拍車がかかる「マンションのある街」への変貌。「マンション住人が作品を買ってくれるようになりました」。伝統ある鋳物工場は新旧住民のコミュニケーションの場として再生しつつある。

（編集委員　芦田富雄）

＝十曜日に掲載

## 早船ちよ「キューポラのある街」 川口市（埼玉）

### 作家と作品

はやふね・ちよ（1914―）岐阜県古川町生まれ。1カ月後に同県高山市に移る。15歳で高山を離れ滋賀県や長野県の製糸工場などで働く。18歳の時に上京し、科学技術史研究家の井野川潔と知り合い1年後に結婚、学習塾を共同で経営する傍ら文学とロシア語の勉強を始める。

33歳で半自伝小説『峠』を執筆、その後、75歳まで小説、随想、童話、新民話など様々なジャンルの作品を発表した。

『キューポラのある街』は1959年、45歳の時に雑誌に書き始めた。映画化で大きな反響を呼び、連載は第6部まで続いた。様々な前近代性を内包していた川口の鋳物産業。その環境の中で自我に目覚め、たくましく生きる若者の姿を描いている。

生まれ育った、深山に囲まれた静かな飛騨の城下町と鋳物産業の町とは一見、対照的。「だからこそ男性的なキューポラの湯だし作業や鋳物工の群像に感動した」と早船は語るが、厳しい風土とそこに生きる人間像というモチーフは同一の糸に結ばれている。

◇

記事中の引用は、けやき書房刊。理論社からも出ている。